

IATSS三十周年によせて

## “文系”会員の19年

杉田房子 旅行作家

フェリス女学院大学英文科卒業。大宅壮一門下生で大宅壮一東京マスコミ塾の塾生・講師も。観光政策審議会委員をはじめ、運輸、建設、大蔵、国土各省の審議会委員を歴任。日本ナショナル・トラストの世界遺産である白川郷の担当理事。日本ペンクラブ、日本旅行作家協会の各会員。



当学会会員に加えていただいたのは1986年。はや19年も前のことになる。周りは“理工科系”専門の方ばかりのように見えて、“文系”の私など小さくならざるを得なかった。ところが斎藤茂太さん、岡部冬彦さん、岡並木さんといった方々のように“文系”でも博学と智恵の打出の小槌をお持ちの方々が活躍されていたので、なんとか力づけられた。

交通と私の関わりは、1983年に建設省が「レディース・ロード・フォーラム」をつくり、女性も道路や交通について勉強しようと女性だけの会がスタートし、私もその一員に加えていただいたのに始まる。工事中の現場へヘルメットに長靴姿で視察したり、勉強会を持ったり、楽しく学ばせていただいた。当時の建設省や運輸省の幾つもの委員会のメンバーに加えていただいたのもこの頃だった。

当学会ではいろいろな委員会からお声がかかり、褒賞委員や編集委員にKO・賞審査委員長などまでお務めした。褒賞委員としての学会賞候補の現地視察は、それまでの“文系”的な私の取材旅行とはだいぶ違って、よい体験になった。

岡部冬彦さんの音頭とりで始まったKO・Award は遊び心のある面白い賞だった。なんと私が審査委員長。KO・とは何か。一説には「こうさん」とも読めるから、降参と手をあげるような交通に関わりのあるアイデアを持つ人を選びたい、として始まった。1988年にスタートし第一回の受賞者は山田圭一さん。大学教授で、航空山岳写真家。二回目は模型列車のコレクターでは世界でも名高い原信太郎さん。コクヨの相談役でもあった。芦屋にある立派なコレクションを実際に動かして見せていただいたが、数の多さ、精妙な列車の姿。すっかり夢中になった委員一同は、最終上り新幹線に乗りそこなうほど魅了された。阪神・淡路大震災の被害も復旧とお知らせがあった。すごい意欲に脱帽である。三回目は、パリ在住の加藤一さん。自転車競技者であり画家でもある。国際自転車競技への貢献で日本人としてはじめてギドン・ドール(金のハンドル)賞を授与された。絵画でも疾走する速度感に溢れ、キャンバスの上に風を表現した抽象画家だった。この賞が三回で終わってしまったのは残念だった。

学会誌にグラビア頁が登場したのは1992年からで、私が編集委員になってから。編集会議が開かれる度に「どうしたら魅力的な学会誌ができるか」と意見を出し合いながら討議したが、私が「私は世界の国々を取材で訪れたくさんのスライドがあるから、世界の交通事情を中心にしたグラビア頁を加えたら如何なものか」と言ったのが縁でスタートしたグラビア頁は今は37回目。10年を越えるロング・ランになった。

最初は南米から始めたが、これは外務省とJICAから2回にわたり「中南米における日系女性の生活調査」をテーマに、アルゼンチン、ブラジル、ペルー、ポリビア、パラグアイ、メキシコ、ドミニカ歴訪の所産。アマゾン奥地まで入り、対岸が見えないほど広大なアマゾン川や轟きわたるイグアスの滝にさすが南米と見入ったものだが、何を慌てたのかこれを2回でまとめてしまった。国別・都市別にしても10回以上続けられるのに、手持ちのスライドが多いので、いずれまたゆっくりご紹介しようと思ったらしい。ところがアマゾンの奥地ですら、最初は電気も水道もなかったのが二度目の時は立派な家屋

に冷房・カラオケ完備。どの国も変化激しく、グラビアの題材選びに苦労している。